

やまなし介護感動ストーリー大賞
受賞者作品集

令和7年2月

山梨県



やまなし

「やまなし介護感動ストーリー大賞」は、介護に関する感動エピソードを募集し、選出されたエピソードの応募者及びエピソードに登場する介護サービスを提供した個人・事業所を表彰するとともに、受賞エピソードを漫画化、冊子を作成し、関係各所へ配布することで、介護の魅力発信や若年層などに介護のすそ野を拡大することを目的としています。

このたび、介護サービス利用者やその御家族、介護職員の方から多数のエピソードを応募いただき、改めて感謝申し上げます。

審査を行った結果、次のとおり、グランプリ 1 点、準グランプリ 2 点を選出させていただきました。

選出された作品については、本年度中に漫画化し、介護の魅力発信等に活用して参ります。

(受賞者一覧)

表彰種類	作者/介護職員/事業所	氏名/事業所名
グランプリ	作者・介護職員	入野くるみ 様
	作品に登場する事業所	明山荘 小規模多機能型居宅介護事業所 様
準グランプリ	作者	望月仁美 様
	作品に登場する介護職員	なじみの家 はんでこうし 天神中条 相澤洋子 様
	作品に登場する事業所	なじみの家 はんでこうし 天神中条 様
準グランプリ	作者・介護職員	宮澤理恵 様
	作品に登場する事業所	明山荘 小規模多機能型居宅介護事業所 様

「指切りげんまん」 入戸野くるみ 様

私は、介護福祉士として働き始めて半年が経つ新卒者です。

ある日、お泊まりが利用者Nさんしかおらず職員の方が多かった日がありました。私はいつも通り掃除を始めようとしていましたが、先輩職員に「利用者Nさんとお話して。コミュニケーション図るのも仕事だからね。」と言われ、先輩職員に申し訳なさを感じながらも、利用者Nさんのもとへ行きました。

最初は世間話から始めましたが、Nさんの方からご自身の今の不安や葛藤を話し始めました。私はその方の話に耳を傾け、頷き相槌を打つことしかできませんでした。先輩職員は利用者さんと話をする時、寄り添いその時にかけて欲しいと思う言葉をかけています。しかし私はいつも、利用者さんの話を聞くだけです。その時も、Nさんが話をしてくださる中で、自分の不甲斐なさを感じていました。するとNさんが、「私はあんたのこと信頼しているから誰にも言わないでね。」と笑顔で言ってくださり、その後もNさんは、「あんたはいつも一生懸命働いているから、それを見て私はあんたを信頼してるんだよ。」とNさんから私が今欲しいと思った言葉を言ってくださいました。私は嬉しくなり、小指を差し出して指切りげんまんをしました。

自分にできることがあるのならば、それを一生懸命やり続ければ、必ず誰かが見てくれている、ということをおぼろげに学べた日になりました。これからも、何事にも一生懸命頑張っていきたいと思えます。

「共に楽しく介護を」 望月仁美 様

「楽しく一緒に介護をしていきましょう。お母さんも元気が戻りますよ。」百歳を目前にし骨折入院をした母、手術は成功したが、薬も食事も受け付けず衰弱するばかり。家に帰りたいと願いを言う。困り果てた私に介護士さんがかけてくれたこの言葉は、介護に前向きになる力をくれた。介護士さんはすぐに病院と連携を取り、施設と自宅での生活を可能にしてくれた。薬や食事の取り方、おむつ交換、着替え等のやり方は自宅でも教えてもらった。自信なさげな私に、大丈夫ですよといつも寄り添ってくれた。一人ではない、何でも相談できる人がいる、それだけで心強かった。

日ごとに元気を取り戻す母。以前のようにありがとうの言葉もかけてくれた。辛いとばかり思った介護生活に、希望と楽しみが加わっていった。ある日、母を施設に迎えに行くと大事そうに何かを抱えてきた。それは「百歳おめでとう！」と描かれた、職員の方からの心温まる色紙であった。花の苗も添えてあった。母はよほどうれしかったのか、家へ帰っても繰り返し色紙を手に取り見つめていた。

その母が自宅で急逝して3ヵ月が経つ。寂しさは大きいですが、母の願いを叶え自宅で最期を迎えられた。母も私も幸せだと感謝している。最期の日々に楽しい思い出が刻まれたのは、いつも寄り添ってくれた介護職員の皆さんのおかげだ。庭に植えたあの時のクリスマスローズの苗。母の思い出と共に、いつまでもきれいな花を咲かせてくれることだろう。

「優しいのは・・・」 宮澤理恵 様

ごく最近の話になります。

ご利用者様の送迎中に脛がつってしまったんです。すぐ目の前にあるコンビニに避難しご利用者様に事情を説明。しばらくすると落ち着いたのでゆっくり出発しました。助手席に乗っていた方が「慌てないでいいよ。」と優しく声を掛けてくださいました。

その時に乗っていたご利用者様は3名。無事に2人目の自宅にたどり着きました。「さあ、あと1軒。」と、ここでまた脛がつってしまい、治まったと思ったら今度は反対の足！もう、情けないやら申し訳ないやら。何度も「申し訳ありません。」と謝る私に「大丈夫だよ。」「ゆっくりでいいから。何もしてあげられなくてごめんね。」と仰ってください、更には「雲が黒いよ。」「ここは凄い坂道だね。」と気を紛らわせようと一生懸命話しかけてくださいました。

その方普段は寡黙な方なのです。

いつもより遅い帰宅になってしまいましたでしたが怒るわけでもなく、「優しい人が送ってくれてよかったよ。」「また来てね。」とまたまたありがたいお言葉！

いえいえ、優しいのはあなたです。

ご利用者様の気遣いに心も目頭もじんわり温かくなりました。

事業所に戻り報告すると「水分不足かも。」と貴重なOS-1をスッと差し出してくれた管理者にも実は感動したことは本人には内緒です。